

---

# 真実のトビラ

usa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真実のトビラ

### 【Nコード】

N8507L

### 【作者名】

u s a

### 【あらすじ】

黒の組織壊滅から一カ月後。ケガを負ったコナンはついに退院する。

が、蘭、園子、和葉に平次との会話を聞かれてしまう。

（カップリングは新蘭です）

初めての作品です。いろいろ分かりにくいところもあるかと思いますが、

どうぞ、見てください！

## プロローグ（前書き）

初投稿です！

コナン大好き娘の作品をどうぞご覧ください！

## プロローグ

黒の組織との対決から、早一ヶ月。

ジンとの戦いで、ケガを負った江戸川コナン（工藤新一）は今日退院する。

「コナン君？調子はどう？」

蘭はいつも病院に来ては、コナンの世話をしてくれている。

ちなみに、蘭は未だにコナンの正体には気付いていない。

いつか話そうと思っていたのだが、なかなかタイミングがとれなかった…。

3

「？どうしたの、コナン君。難しい顔して…。まだ具合悪い？」

（顔ちかっ／＼／＼）

心配そうにコナンを覗き込む蘭の顔がどアップにきて、コナンの体温は一気に上昇する。

「あれ、コナン君、顔赤いし、少し熱いよ？熱あるんじゃない？」  
蘭はそう言って、コナンの額に自分の額をこつんとぶつける。

ただ、それは逆効果にしかならず、コナンの顔はさらに熱くなる。

「やっぱり、熱っばいよ？もう少し退院延ばしてもらう？」

「だっ、大丈夫だよ、蘭姉ちゃん。ボク、もう元気だから！」

コナンは慌てて顔を離すと、蘭も安心したように笑い、  
「じゃ、私、ちよつと先生と話してくるね」  
と言い残し、病室を後にする。

「ふう……」

一人になった病室で、コナンは静かにため息をつく。

だが、その静けさは、この人物によって、すぐに去って行った。

## プロローグ（後書き）

コ「なあ、作者さん、『この人物』って誰だ？」

作「えゝ？教えなきゃダメえゝ？」

コ「…さつさと教えろよ」

作「この次にわかるじゃゝん」

？「気になるんやったら、自分で推理してみいや」

コ「ゲッその声は・・・」

もう誰だか、皆さんおわかりですか？

## 秘密の会話（前書き）

関西弁、初挑戦です。

間違ってたら、ごめんなさい！

## 秘密の会話

ガラッ

「よお、工藤！」

「平次！待ちいや、このドアホ！」

大きな関西弁とともに、二人の人物が入ってきた。

（ハハ… やっぱり来た…）

コナンは服部平次とその幼馴染、遠山和葉を見て、苦笑を浮かべる。

「いつも言ってるけどなあ、何でアンタはコナン君のこと、工藤って呼ぶの！？」

「え？ま、まあ、この坊主、工藤によう似とるからなあ…」

「やっぱりアンタ、頭おかしんとちゃう？」

「なんやと！？」

「ねえ二人とも、ココ、病院だつて知ってた？」

ケンカを始めた二人に、コナンは嫌味っぽく言った。

「すんません…」

二人は謝ったが、平次の眼だけは謝っていなかった。

「あれ、コナン君。蘭ちゃんどこ行きおったん？」

「蘭姉ちゃんなら、先生とお話ししに行っただよ」

「そうなん？ほな、あたしも行ってくるわ」

「…んで、何の用だよ、またアポ無しで来やがって」

「ええやんか別に。せっかく見舞いに来てやったんやで？」

平次はコナンの頭を小突いた。

「そーいや、工藤、解毒剤の方、どうや？」  
平次が言っと、コナンは顔色を変えた。

「い、イヤ、まだ当分完成しねえよ。ほ、ほら、灰原も入院してるし……」

そう。組織との対決で、灰原は重傷を負い、しばらくは入院生活だ。

「……あのちっこいねーちゃんやったら、腕が動くんやったら、研究する言うと思たんやけど」

「そ、そうか……？」

コナンは明らかに動揺している。

だが、その理由はあとで語るとしよう。

## 秘密の会話（後書き）

平「工藤、何動揺してんのや？」

コ「えっ？ いや別に…っ」

平「なあ作者はん、教えてくれへん？」

作「えーっとなえ…」

コ「わーっ！！いい、言わないでくれ！頼むから！」

次回、コナンの動揺のわけが明らかに！

コ「やめてくれ…」

## 再会（前書き）

コナンの動揺の真相はまた次回になりそうです…。

すいませ〜ん…。

## 再会

「蘭ちゃん！」

後ろからの声に、蘭はハツとして振り向く。

「和葉ちゃん！来てくれたの？」

「うん、まあ、平次の付き添いみたいなもんやけどね」

「久しぶりだねえ、どんぐらいあってないかなあ」

「せやねえ、…二か月ぐらいとちやう？」

二人は久しぶりの再会に、手を取り合って喜んだ。

「今、何してたん？」

「コナン君の退院手続き。もう終わったから、ちょうど病室に戻るうと思つて」

「ほんなら、はよいこ！コナン君、平次と一緒にやから、退屈しとるかもしれへんし」

まず、それはないだろう…。実際、今病室では、平次がコナンの頭を小突いているところである。

「にしても蘭ちゃん、毎日病院来てたんやろ？大変やったね」

和葉が言つと、蘭は笑って手を振る。

「そんなことないよ。だって、コナン君、病院に一人でいたら、不安でしょ？」

いつも大人っぽいけど、根はまだ子供なの」

この言葉をコナンが聞いていたら、さぞショックを受けただろう…。

「そう言えば、工藤君とは、最近連絡しとるん？」  
そう言った瞬間、蘭の顔は一気に暗くなる。

「ご、ごめん蘭ちゃん。そんな顔させるつもりは…」

「ううん、いいの」

慌てて謝る和葉に、蘭は笑顔を向ける。

「実はね、ここ一カ月ぐらいかな…、新一から連絡来ないの…」

「えっ？一回も？」

「…うん、忘れられたのかな、私…」

当の新一は入院しているのだから、連絡は無理なのだが、蘭達はそんなことは知らない。

「らあ〜ん！和葉ちゃん！」

再び、後ろから声がした。

「園子！園子も来てくれたの？」

園子の思わぬ登場に、蘭は驚きの表情を浮かべる。

「まあね。この園子様がわざわざあの生意気なガキンチョの見舞いに来てやったんだから、感謝なさい」

「園子ちゃん、相変わらずやな…」  
素直じゃない園子を見て、和葉はぼそっとつぶやいた。

三人で賑やかに（本当はいけなが）おしゃべりしながら、病室へと向かった。

コナンの病室のドアに、手をかけようとすると、二人の話し声が聞こえてきた。

「なあ、工藤…」  
平次の声がする。

（工藤…！？）

「あ？なんだよ」  
普通に返事をするコナン。

（いつもなら、否定するのに…。僕は新一兄ちゃんじゃないよって…）

「解毒剤、まだ完成しないんか？」

（ゲドクザイ…？何ソレ…）

「えっ？い、いや、まだかかるみたいだぜ？ほ、ほら、灰原も入院してるし…」

（哀ちゃん…？何で、哀ちゃんが出てくるの？）

蘭は頭が混乱し、隣の二人を見る。

でも、二人もさっぱり分からない、という顔をしている。

その時、和葉が思いきつてドアに手をかける。

中の二人はまだ話している。

ガチャッ…

「…コナン君…？」

## 再会（後書き）

園「何か、私の出番、少なすぎない？」

作「えっ？そ、そうですか？」

蘭「そ、園子、いいじゃない。またこの次出してもらえれば」

作（蘭ちゃん天使！）「そうですよ、園子さん。次回も出しますから……」

園「本当でしょうねえ？（ギロツ）」

作「ヒイイっ」

タピューーーン

園「こらっ、逃げるな作者あ！」

次回、コナンピンチです。

正体（前書き）

ついに（？）コナンピンチです！

## 正体

ガチャッ

「コナン君」

突然の蘭、和葉、園子の登場に、コナンと平次は言葉が出ない。

「な、なんや、皆いつからおっとつたんや」  
平次はすでにオドオドしている。

「ついさっきや。話、少し聞かせてもらたわ」  
コナンと同じく声が出ない蘭に代わり、和葉は言った。

「…ねえ、コナン君は、新一じゃないよね、いつも、そう言ってたもんね」

蘭の瞳からは、いつものあの強い光がなくなり、暗い色になっていた。

「ねーちゃん、い、今の話はな」

「平次！あんたは黙つとき！」

だが、冷静さを失った蘭に、ただ肩をゆすぶられるコナンに、強力な助け船が現れた。

「いいじゃない、工藤君。話してあげなさいよ。彼女たちには、知る権利があるわ」

哀の声は小さく、どこか弱々しかったが、今はその声も、小さな病室に響き渡るようだった。

「は、灰原、お前、今…」

「話してあげてって言ったのよ、あなたの本当の正体を」

「しょう…たい…？」

蘭が戸惑った目で言う。

「彼の本当の正体は、『工藤新一』」

「…嘘よ」

最初に口を開いたのは、園子だった。

「だって、本当にコナン君が新一君なら、ずっと蘭のそばにいて、何で何も言わなかったの!？」

「それは…」

「もういい、灰原。あとは俺が言う」

コナンはようやく口を開いた。

「オレの正体は、確かに工藤新一だ。

何で俺がこんな姿になったのかは、話すと長いけど…」

コナンはぼつぼつと語り始めた。

まず、トロピカルランドでのこと。『江戸川コナン』誕生のわけ。灰原哀の正体。黒の組織壊滅のこと。

「…じゃあ、新一は、私を信用してないから、何も話さなかったんじゃないんだね…？」

「ったりめえだろ」

今、少しだけだが、蘭の瞳に明るい色が戻った。

「あのー、ちょっとええか？」

平次が口をはさんだ。

「さつきから気になってたんやけど、解毒剤のデータはどないしたんや？」

「え？工藤君から聞かなかった？データなら…」  
「わーっ！言うなよ、灰原」

コナンが慌てて言うが、一步遅く…

「工藤君が組織のアジトから逃げるときに、落としてきたわよ」

一瞬、ぞっとするような寒気がコナンを襲った。そして…

「何や、工藤。落としてきたやと？間抜けなことしよったなあー」

平次にジト目で睨まれ、コナンは首をすくめる。

「じゃあ、新一はもしかして…元に戻れないの？」

蘭はそう聞いた。コナンが何よりも恐れていたことだった。

「で、でも、探したら、もしかしたらあるかも…」

「博士に頼んで、探してもらったよ。でも、見つからなかった」

また暗くなった蘭を励まそうと口をはさむ園子に、コナンは言った。

だが、その時、思わぬところから、思わぬ人が、思わぬ発言をした。

「お探しのものはこれかな、名探偵？」

## 正体（後書き）

作「いやー、今日は一日疲れた!」

コ「何かあつたのか?」

作「いやー、それがさー、今日は修学旅行の振り替え休日だったわけよ」

平「休みで何で疲れるんや?」

作「まあ、休み疲れてやつ?」

コ「何だ、そりゃ?」

次回、コナンと蘭、ラブラブモード突入!?

コ「何だよ、それ~~~~~!!!?!」

## お別れ（前書き）

少し間が空いてしまいました。  
すいませんっ。

## お別れ

『お探しのものはこれかな、名探偵』

声のする方に振り向く。すると、そこにいたのはやはり……

「キッド！」

月下の奇術師こと怪盗キッドだった。キッドは、いつの間にか窓枠の上に立っていたのだ。

もちろん、そんなところにいるキッドを、コナン、いや、新一と平次が見逃すわけもなく、

二人はすぐさま、キッドにとびかかる。

だが、そんな二人を、キッドは難なくよける。

「おいおい、酷くないか、名探偵のお二人。私は君が今まさに求めていたものを、  
持ってきてあげただけなのに」

キッドはそう言うと、白いマントの中から、黒い小さなケースを取り出した。

「それは……！アポトキシン4869のデータ！」  
哀が一目見て言うと、新一もハッとした。

確かに、色と言い、形といい、自分が組織との対決の際、見つけたものにそっくりである。

でも、コイツは泥棒。そう簡単に信用していいのか……。

「本物よ、工藤君」

新一の心を見透かすように、哀は言った。

「ちょお待てや！何でお前がそないなもん持ってるんや！？」

横で話を聞いていた平次は言った。

「あの組織に、ちょっとした用がありました。残念ながら、その理由は明かせませんがね。仕事ですから。」

で、その仕事の帰りに、たまたまその名探偵がコレを落としていくのを見たんでね。

彼が持っていたものですから、よほど大事なものだろうと思って、機会を見て、渡そうと思ってたのですよ。

まあ私は名探偵の落とし物に興味があっただけですがね」  
キッドはニヤリとする。

「（何かしつくりきいひんなあ…）」

平次はまだ言っていた。

「なあ、名探偵。覚えてるか？オレが初めて工藤新一に化けたときに、お前に言った言葉」

「ああ、覚えてるぜ、コソドロさん。『世の中には、謎のままにしておいた方がいい、謎もある』」

だろ？…これも、謎にしておいた方がいい、謎ってことかな」

「ビンゴ！さすが名探偵。それでは、もう私の役目は終わったようなので、

そろそろ失礼いたしましたようか」

キッドは哀にケースを渡した。

「ありがとう。怪盗さんにお礼を言うなんて、きつと最初で最後ね。ま、おかげでやっと、研究がはじめられるわ。もつとも、誰かさんがへましなかったら、もつと早く始められたんだけどね」

最後に哀はじろつと新一を睨む。

「それでは、ごきげんよう」

そう言つてキッドは、窓枠から飛び降りた。

「「「あつ」「」」

蘭達が窓から下を見たが、すでにキッドの姿はなかった。

「チツ、逃がしてもうたか！ええんか工藤、これで」  
いまだに平次は言っているが、新一はこう言つた。

「いいんだよ、コレで」

「？やけにきつぱりと言いよるなあ。何でや？」

「コレ、読んでみるよ」

新一は、小さな紙を、平次によこした。  
それを平次は、声に出して読み上げる。

「『わたくし、怪盗キッドは、怪盗の名を降ろさせて頂くべく、皆様にお別れのあいさつを申しあげます。もうわたくしの姿を見かけることはないでしょう。少なくとも、キッドとは。』

では、今度は月の下ではなく、暖かな陽の光の下で会えることを願つて。

盗キッド』」

「奴はこれと、データを届けに来てくれただけさ。何もしてねえ、だろ？」

新一は言った。

「ん、まあ…せやな」

平次もようやく頷いた。

「あゝあ、もうキッド様のお姿を見られないのねえ…」  
そう言ったのは、もちろん園子である。

「え、ええやん園子ちゃん。またひとつ、平和になった思えば」  
和葉がとりあえず慰める。

「それに、データも手に入ったし。早速、研究を始めなきゃね。  
その間抜けな探偵さんのために」

哀のことばに、新一は苦笑する。

「あ、あのツ…それで…新一は元に戻るの？」  
今まで黙っていた蘭が口を開く。

「…成功すれば、ね」

哀は自信なさげに言うが、その言葉だけで、蘭には十分だった様子。  
たちまち花のような笑顔になると、新一がまだ小学生の姿だったと  
忘れたかのように、

勢いよく抱きついて、泣き始めた。

「おつ、おい蘭！／＼／＼／＼」

「工藤、顔赤いで？」

すかさず平次が冷やかす。

「うつ、うつせバーロー！／＼／＼／」

赤い顔で怒鳴られても、そこまで迫力はない。

「なんや、工藤。お子ちゃま顔で赤くなっても、かわいく見えるだけ……いててっ」

「平次！ウチらはお邪魔や、お・じゃ・ま！」

「ささ、あたしらは出ますか」

和葉と園子は、痛がっている平次をよそに、耳を引っ張って病室を出る。

「「……………」」

いきなり二人きりというのも、困りものである。

現にこの二人は、何を話していいかわからず、うつむいて黙ったままである。

「あの」「あのさ」

二人は同時に口を開く。

こうなると、次に起きることはだいたい、

「何？」

「いや、お前から……」

といった会話である。

「…ありがとね、新一」

「は？」

思わぬ言葉に、新一は少しポカンとする。

「だって、今まで、新一として、傍に居られなかったときも、本当はすぐ傍で、私を見守っていてくれたでしょ。」

それに、時には、命がけで、私を守ってくれた。だから……ありがとう」

そう言っただけ、新一にいつもの明るい笑顔を向ける。

「オレの方こそ、ありがとな」

新一も言った。

「いつ戻ってくるかわからない俺を、ずっと待っていてくれて。それに……こんな受け入れがたい話も信じてくれてさ。」

オレ、本当は、このこと言ったら、蘭に殺されんじゃないかって、ずっと思ってたし」

「なっ、何よ、それ？どーいう意味よ!？」

「そのまんまの意味」

「言っただけ!」

いつの間にか、いつもどおりに戻っている二人。  
何となくおかしくなって、笑いだした。

その時の蘭は、久しぶりに心の底から笑ってくれたような気がした。

この笑顔を、ずっと傍で見たい。

新一は自然とそう思った。

## お別れ（後書き）

作「いやーどうも！久しぶりの投稿となっていました」

新「何かあったのか？」

作「実は、今度の金曜日は、うちの学校テストで…。

ちよつと忙しかったものですから…」

新「ンじゃ、勉強しろよ」

作「やだ、新ちゃん、冷たい！」

新「誰が新ちゃんだよ！」

作「す、すみません…」

次回、ついに新一と志保が…！？

ついに!?(前書き)

さあ今回はどうなるでしょうか…?  
作者にも、予想が付きません!(おいおい…)

ついに!?

一時間後、ようやく病院を出た新一と蘭。  
向かう先は、もちろん毛利探偵事務所。

「なあ、蘭、わりいんどけどさ…」

いつものように、お茶を入れる蘭に、新一は言った。

「何、新一？」

「おっちゃんにはさ、オレの正体、黙っててくんねえかな？」

その言葉に、蘭は少し驚きの表情を浮かべる。

「な、何で？」

「たぶん、灰原のことだし、あと1、2週間で解毒剤、完成させる  
と思うんだよ。」

でもさ、それまでの間とりあえず、オレは江戸川コナンとして過  
さなきゃいけないわけだし…。

おっちゃん、オレの正体知って、怒らないと思うか？」

「思わない」

蘭は予想以上にきっぱりと言った。

「だろ?となると、黙ってこの数週間を過ごした方がいいんだよ」

「そうね…」

「でも、灰原もこれで生き生きしてきたし、すぐに完成させてくれ  
るぜ、きつと」

新一は自信ありげに言った。

「…そんなに、信頼し合ってるんだ…」

「ン？なんだ？」

「なっ何でもない」

蘭がそう言う時は、大抵何かあるのだが、新一は取り合えず黙っていた。

そして、新一の予想より、ちょっと遅れて3週間後

哀は予定より早く退院し、無事に解毒剤が出来たことを、新一に知らせた。

「そうか！わかった、すぐ行く！」

哀からの電話に、新一は眼を輝かせて言った。

「どうしたの？」

「博士のそこ行ってくる。灰原が、解毒剤完成させたらいいんだ！」  
幸い、小五郎は麻雀に行っていて、今は蘭と二人である。

「待つて、新一。私も行く」

蘭はそう言ったが、新一はそれを拒んだ。

「いや、お前はココにいてくれ。1時間して帰ってこなかったら、博士の家に来てくれ」

「……わかった」

阿笠邸にて

ピンポーーーーン……

『工藤君？開いてるわ、入ってきて』

その言葉を聞くなり、新一は中に入って行った。

「おお、新一。哀君は地下室じゃよ」  
博士が出てきて、そう言った。

「わかった、サンキュ、博士」  
新一はそう言う、地下室へと急いだ。

ダアーン！！

「ちょっと工藤君、もう少しドアは静かに開けてくれない？」

そう言ったのは、哀…ではなかった。

そこにいたのは、スラリとした、綺麗な女性だった。

「み、宮野…？」

見慣れない姿に、新一は少し驚く。

「ええ、先に元に戻らせてもらったわ。どうやら成功みたい。  
結構苦しんだけどね」

哀、いや、志保はそう言う、新一にもカプセルを渡した。

「…サンキュ、宮野！」

新一は少し笑って言った。

不覚にも、その笑顔を見て、志保はドキリとする。

（バカね、もう忘れるって決めたのに…）  
志保は心の中で、フツと笑った。

一方新一は、カプセルを受け取り、工藤邸にいるところ。

（やっと元に戻る…！この姿とも、おさらばだな）  
新一は服を着替えると、コナンの姿に、お別れを言う。

（じゃあな、江戸川コナン。結構楽しかったぜ）  
そして、カプセルを口に入れた。

ド…ックン

再び、あの苦しみが、新一を襲う。

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン…

「あああああああ！…！」

次第に、新一の意識は、遠くなっていっていった…。

ついに！？（後書き）

作「突然ですが、解毒剤を完成させた志保さんに、お話を伺ってみたいと思います！志保さん、今どんな気持ちですか？」

志「別にこれと言ってないわ。ま、あの探偵さんが喜んでたから、いいんじゃない？」

作「ちなみに…、志保さんの、新一さんに対してのお気持ちは？」

志「な、何言ってるのよ！？なんとも思っていないわよ／＼／＼／」

作「（ウソだな…）」

次回、三人の高校生活スタート！

## 新しき友（前書き）

前回、とうとう完成した解毒剤を飲んだ新一。  
新一に対しての思いを捨てる決意をした志保。  
そして、ただひたすら、新一の帰りを待つ蘭。

新一は無事に元に戻るのか！？

## 新しき友

新一が出て行ってから、もうすぐ一時間。

そろそろ行った方が良く…よね。

蘭は時計を見て、そう思った。

『1時間して、戻ってこなかったら、阿笠博士の所に出て行く前に行った新一の言葉がよみがえる。』

蘭は事務所を出て、阿笠博士の家へ向かった。

ピンポーン……

『ハイ?』

誰だろう、女性の声…。哀ちゃん?違う、もっと年上の女性…。

「あ、あの、毛利蘭です」

「…開いてるから、入って」

中に入ると、白衣を着た美人な人が出てきた。

「工藤君なら、自分の家よ。そろそろ、目を覚ますと思うから、ここで待ってなさいよ」

そのしゃべり方で気付く。

「哀ちゃん…じゃなくて、えっと…志保さん?」

志保の本名を新一から聞いていた蘭は、そう聞いた。

「ええ。少し驚いたかしら、こんな姿で」

「い、いえ…、そんなこと…」

赤みがかった、茶髪のウェーブの女性はフツと笑う。

「コーヒーでも飲む？そのうち彼も来るわ」

そう言つて、志保はキッチンへ行き、数分と経たないうちに、いい香りのコーヒーが入ったマグを、二つと、ミルクと砂糖をお盆に載せて持ってきた。

「どうぞ」

「あ、ありがとう…ございます」

雰囲気はさほど変わらないのに、姿が違うからか、蘭は少し緊張している。

少し震える手で、蘭はコーヒーを口に運ぶ。

「……おいしい…！ありがとう、志保さん」

ようやく蘭は笑顔になる。

「あなた、私が怖くないの？」

志保が驚きの表情で言う。

「どうしてですか？」

「だって私は…。今まで何人もの人たちを殺してきた、マッドサイエンティストなのよ？」

そして、あなたと工藤君の仲まで引き裂いてしまった…」

志保は眼を伏せる。

「そんな！私、志保さんのこと、怖くなんかありません！むしろ、仲良くなりたいですから」

蘭は笑って言った。

志保はぬれて光った瞳を、蘭に向けた。

「あ…、あり、が…とう」

そう志保は呟くと、またうつむいてしまった。

志保の眼からは、美しい雫が一つ、また一つ、と落ちていく。

「ねえ、志保さんはこれからどうするの？」

蘭は遠慮がちに言った。

「私は…これといって、することはないけど…」  
その言葉に、蘭は考えた末、こう言った。

「うちの高校に来ない？」

「帝丹高校に？」

蘭の考えに、志保は驚く。

「で、でも、私は…」

「いいじゃない！することはないんでしょ？」

だったら、もう一度、青春をやり直そう！って思ってたさ」

それでも、志保は少しためらう。

「いいじゃないか、志保君。蘭君や新一君と、高校生活を楽しむのも」

博士が現れて、そう言った。

「博士。でも」

「志保君、これからは、自分のために、生きなさい。」

ワシはそのことを、誰よりも臨んでおる」  
博士は志保に優しく笑いかけた。

「ありがとう、博士」

志保も少しだけ、笑い返す。

「…蘭さん、私、帝丹高校へ行くわ」

「わあっ、ホント？やったー？」

蘭は本当にうれしそうだった。

「ねえ。志保さん」

「今度は何かしら？」

「…志保で…いい、カナ？」

「え？」

「私、あなたと仲良くなりたいもの。だから…志保って呼んでいい？」

蘭の眼は、小さい子が大人に物をねだる時のようだった。

「もちろんいいわよ。…蘭」

志保はそつと言った。

蘭も笑顔で、

「これからよろしくね、志保」  
と言った。

「…おめーら、ずいぶん楽しそうだな…」  
後ろから声がした。

「あ、あれっ？新一、いつからそこに…？」

「ほ、ホント、驚かさないでよ…」

「ったく、こっちはあんだけ苦しんでたっつーのに、こっちは二人で談笑かよ…」

「あら？私だって、戻る時は相当苦しんだけど？」

拗ねたような新一に、志保は言った。

「ま、まあ、いいじゃない、二人とも。仲良くやろうよ」

「こっちはこの探偵さんのおかげで、イヤと言うほど事件に巻き込まれてるのに？」

「それは言えてる」

蘭と志保は顔を見合わせて頷く。

このあと、二人の手によって、新一の探偵としてのプライドがズタズタに引き裂かれたのである。

その会話は、新一に同情して、公開しないこととしよう…。

新しき友（後書き）

作「新一、どれぐらい寝てたの、アンタ？」

新「2時間ぐらい？」

作「うつわ、そんなに寝てたの。志保さんの解毒剤やばッ」

志「何か？」

作「いえ、別に……」

次回？…どうなるのかなあ…？

## 新しい生活（前書き）

今回から、ついに蘭と新一の恋愛が動き出す！……かも。  
取り合えず、見てください。

## 新しい生活

ピリピリピリピリピ.....

「ふぁ...」

もう朝である。いつもよりも、体が重い。  
そっか、元に戻ったんだしな...

そんなことを考えながら、新一は目覚ましを止める。

昨日も夜遅くまで推理小説を読んでいたためか、まだ眠い。  
でも、今日は月曜日。今日から久しぶりに、高校へ行くのだ。

「しゃーねえ...起きるか...」

ピンポーン.....

「ンだよ、朝から...」

おそらく、いまチャイムを鳴らしたのは...

「おはよう、新一」

むろん、蘭である。だが、それだけではなかった。

「みつ、宮野お!？」

そう、宮野志保もいたのである。

「あら、何よ、その驚き方」

「つ、っーか、お前、何でここに…」

「居ちゃ悪い？」

志保は帝丹高校の制服を着ていた。

「新一、言っておかなかったっけ？志保も今日から、帝丹高校に通うの」

蘭はニコニコしながら言った。

「聞いてねーよ、んなこと」

「じゃ、今言った」

蘭はサラリと言うと、志保と一緒に、家の中に入ってくる。

「うわー…、新一最近掃除してないでしょ？きつたなーい…」  
蘭が中に入るなり、顔をしかめる。

「るせっ」

「ほら、私達で朝ごはん準備しといてあげるから、新一さっさと着替えて」

「えっ？」

「早くしなさいよ。編入早々遅刻なんて、勘弁してよね」

二人にせかされて、なんだか納得のいかないまま部屋に行く新一だった。

ようやく制服に着替え、リビングに戻ると、二人はソファに座り、勝手にコーヒーを飲んでいた。

「あッ、やっと来た」

「早くしないと、コーヒー冷めるわよ」

「てっ、てめーら、いつの間に…」

「早くして!」

「……ハイ」

取り合えず、目の前にある、朝食をいただく。

メニューは、トースト、スクランブルエッグ、コーヒー、そしてなぜかレモンパイ。

何となく、レモンパイから口に運ぶ。

「…美味いつ!」

「よかったじゃない、蘭。工藤君、それ、蘭が作ったのよ」

それぐらいわかる。今までずっと蘭の料理を食べてきたのだし、こんなに美味しいのなら、

蘭が作ったに決まっている。

「…し、新一?」

不安そうな目で、蘭が新一を見る。

「サンキュ、蘭。コレ、すっげー美味いぜ!」

「良かった…」

蘭が少しだけ頬を染める。

「ちょっとちょっと!二人だけの世界に入らないでくれる?」

志保の嫌味っぽい言い方に、二人は瞬時に赤くなる。

「もうこんな時間じゃない。さっさと出ましょ。遅刻するわ」

そう言って志保は立ち上がり、固まっている新一と蘭を残して外に

出た。

そして数秒後、二人もようやく我に返り、慌てて支度をはじめての  
だった。

## 新しい生活（後書き）

作「新ちゃん、かわいいー？二人で赤くなっちゃって♪」

新「るせっ／＼／＼／＼／＼つかそう呼ぶな！」

作「あらら、また赤くなってる…」

新「ぶっ殺すぞ、てめえ…」

命が危なそうなので、これまで！

感想、評価、ヨロシクお願いします！

## 高校生活（前書き）

やっとクラスメイトからの蘭と新一に対してのからかいがかける！  
実は、ものすごく楽しみにしてました。  
二人の赤い顔が目には浮かびます！

## 高校生活

久しぶりの帝丹高校。

志保はすでに職員室に行っていて、今は新一と蘭二人で、教室に向かっている。

久しぶりの教室。もちろん、待っていたのは…

「おっ、工藤君ふつかーっ！」

「うつわゝ、朝から夫婦で登校かよ」

「うらやましいねえゝ」

……クラスメイトの冷やかしの声である。

「ほら、席着け、席！」

担任が入ってくると同時にチャイムが鳴り、ホームルームが始まる。

「えーっと、まず、編入生の紹介だ。入って来なさい」  
担任が言くと、アイツが入ってきた。

「宮野志保君だ。わけあって、君たちよりも一つ年上だが、仲良くしてやれよ」

だが、そんな担任の言葉を聞いていたのは、ごく少数だった。

「おおーっ！超美人！」

「宮野さん、どうぞオレの隣に！」

「お前、ずっずっしいぞ！」

美人の志保の登場に、新一以外の男子全員が騒ぎ立てる。

「おい、お前ら、少しは静かにせんか！じゃあ、宮野君、君は…そうだな、工藤の隣が良いな。  
あそこの席に座りなさい」

「ハイ」

志保は静かに返事をする、と、まっすぐと新一の隣の席に來た。

「またお隣ね、工藤君」

志保はそう言つて、皮肉っぽく笑う。

それを聞いた新一の後ろの男子が

「何々？二人は知り合い？」

「おい工藤！女房の目の前で浮気かよ！」

とからかってくる。

「うっせ！浮気じゃねーし、夫婦じゃねーし！」

新一はそう怒鳴る。

「私は工藤君の隣の家に住んでるの。またつて言つのはそういうことよ」

志保がそう言つと、

「なあんだ、つまんないの」

と、女子が言う。

「人のこと暇つぶしにしてんじゃねえよ！」

その時、新一はちらつと蘭を見た。  
蘭は悲しそうな瞳でうつむいていた。

「？」

この時、恋などに関しては至って鈍感な新一は、この蘭の悲しげな表情には気付かなかったのである。

## 高校生活（後書き）

作「いやー、志保さん、もてるねー。彼氏いない歴14年の作者にとつては、  
うらやましい限りです…」

志「別に私、興味ないんだけどね」

作「ああ！な、なんて可哀想なことを…！」

好きなの？嫌いな？（前書き）

ついに10話に突入！

何だか、あと5話も書かないで終わりそうです…。

好きなの？嫌いななの？

3時限目、眠たい国語の授業がようやく終わった。  
蘭はちらつと新一の席を見る。

アイツのことだから、きつと……。あつ、やっぱり。

新一、ねてる。しょーがない、起こしてやるか。

そう思つて蘭は席を立つ。だけど。

「ちよつと、工藤君。あなたに時限目からずっと寝てるじゃない。  
たまには真面目に授業受けなさいよ」

新一の隣の志保が、難しそうな本から目をそらさずに言う。

「ふぁ……。なんだ、お前かよ……」

「あら、何か問題でも？」

志保は横目で新一を睨む。

「まだオレねみーんだけど……」

「自業自得よ。どうせ推理小説夜中まで読んでたんでしょ？」

新一の表情で凶星だとわかる。

「しゃーねえ、おきつか……」

新一は軽く伸びをする。その様子を、志保は呆れたように見ている。

コナン君だった時も、新一は真面目に授業受けていなかったみたい。

まあ、高校の中でもトップの新一だから、小学生の授業なんかやつ

てらんなかったんだろうけど…。

でも、自分が知らない新一がいた。  
そのことに、蘭は少なからず、ショックを受けていた。

新一と志保は、志保はともかく、新一は楽しそうに、事件について話している。

（…二人って…付き合ってたのかなあ…？）

そんな考えがフツと浮かぶ。

二人は、幼児化していた時から、仲が良かったっていうか…、よく二人でいたし。

まあ、二人は美男美女でお似合いだし…。

「？どーした、蘭？」

「顔色、悪いけど」

蘭の様子に気付いた二人は言った。

「う、ううん、何でもない」

蘭は無理やり笑顔を作った。

#### 放課後

部活で遅くなるから、と言って、新一と志保には先に帰ってもらった。

何か、こんなモヤモヤした状態で会いたくないし、  
もし本当に二人が両思いなら、自分は応援しよう、と蘭は思ったの

だ。

「蘭、一緒に帰らない？」

校門で蘭を待っていてくれたのは…

「園子…」

「アンタ、せっかく旦那が帰ってきてくれたっていうのに、なんか元気ないんだもん。何があつたの？」

園子はわざわざ心配して、待っていてくれた様子。

「別に、何もないよ。園子ってば、ちょっと大袈裟」  
蘭はそう言って笑ったけど、園子にウソは通じない。

「あたしにはわかるよ、蘭。親友だもん」

「園子…」

「…噂の美人転校生でしょ？」

「ハ？」

園子は突然目をつり上げる。

「その人が新一君を誘惑かなんかしたんでしょ！」  
どうやら、誤解している御様子。

「ち、違うよ、園子。私が考えてるのはそういうことじゃなくて…」  
「どういうこと？」

園子がニツと笑う。

（は、はめられた…）

「さ、早く白状しなよ、蘭」

そう言われて、蘭はしぶしぶ同意。

噂の美人転校生（志保）のことを話した。

「宮野志保さん…て、哀ちゃん…のことだよね…？」

「うん」

「そーだったんだ…。彼女がうちの学校にねえ…」

「…あの二人って、お似合いだし、やっぱ付き合ってたのかな…」  
蘭が弱気な声を出す。

「そ、そんなことないよ、蘭！新一君と蘭の絆は、そんなに切れないよ」

「でもなあ…」

なおも弱気な蘭に、園子は言った。

「んじゃあさ、直接確かめてみなよ」

「えっ？どうやって？」

「アンタから、新一君に告白するの！」

園子がそう言つと、蘭の顔は真っ赤に染まる。

「い、いや、そ、それは…」

「いやならいいよ。でも、あたしはこれが一番いい方法だと思う」  
珍しく園子は真面目な顔で言う。

「どうする、蘭？」

蘭の答えは…

「…わかった、園子。私、ガンバってみる」



好きなの？嫌いな？（後書き）

作「最近、突然勉強を始めたせいか、いらつくことが多くなった作者です！」

新「学生なんだからしょーがねーだろ」

作「んゝ、そうなんだけどね…。でも、誰でもそう言うことはあるでしょう!？」

作者半泣き状態。

このおバカな作者をだれか救ってください…。

## 告白！？（前書き）

さあ、いよいよ三人の恋が動き出す！……カモ。

告白!?

一方、その頃の新一と志保は…。

「さっきの蘭、何だったんだ？」

新一は、未だにさっきの蘭の様子真相がつかめていないらしい。

「何がよ？」

「アイツの様子見ててわかるだろ？蘭が慌てて笑いながら『何でもなし』っつー時は、だいたい何かある時なんだよ」

「わからないんなら推理してみなさいよ、探偵さん」

志保は冷たく言った。

「女心が分からないんじゃ、一生かかっても、恋が実ることは無理ね」

「へ？／＼／＼／＼」

新一がそう言っても、志保は何も言わず、スタスタと歩いて行った。

「だっ、だいたい、女心分かってのが無理なんだろ!？」

わかればここに来るまで苦労しねーし!」

「だったら勉強すれば？高校の勉強はつまらないんでしょ？」

志保は嫌味っぽく言う。

「にやろ」

新一は反論が見つからず、少し悔しそう。

「女が考えてることなんかわかるかっつーの…」

新一はぼそりとつぶやく。

志保はちらりと新一を見る。

（工藤君…）

新一の顔は、どこかつらそうで、その半面、幸せそうだった。

蘭のことを考えてるときにしか見せない表情だった。

（よっぽど好きなのね、蘭のこと）

志保は、おそらく自分も今、新一と同じような表情だろう、と思った。

「なあ、宮野。ほら、あれ見てみるよ！」  
突然新一が前方を指差す。

そこには、見覚えのある、でも、今となっては、もう懐かしく思える、三つの人影が。

「よう、お前ら。久しぶりだな」  
新一が腰をかがめて言った。

「あれっ？新一お兄さんだ！」  
カチューシャをつけた女の子が最初に反応する。

「お久しぶりです、新一さん」  
そばかす顔の男の子が言った。

「んっ？なあ新一兄ちゃん、うしろのねーちゃん誰だ？」  
最後に、大きな体の男の子が志保を見て言った。

この三人、歩美、光彦、元太は、まだ宮野志保に会ったことはない

のである。

「ああ、コイツか？コイツはな…悪のマツ…グフツ」

『悪のマツドサイエンティスト』と新一が言おうといて、志保から一発食らう新一であつた…。

「あつ、もしかして、新一さんの恋人ですか？」

光彦が言うと、二人は思わずキョトンとする。

「い、いや、お前ら、コイツはな…」

「違うよ、光彦君。だって新一お兄さんは蘭お姉さんの恋人だもん」  
新一に何かを言わせるすきを与えず、歩美は言った。

「でも、二人で一緒に帰つてるんだぜ？」

「そーですよ。きっと二人は何か関係があるんですよ」

「そっか。蘭お姉さんに言うべきかなあ」

「お前らなあ…人の話を聞け！」

さすがの新一もここまで来ると怒鳴った。

「…ごめんなさーい…」

三人は声をそろえて謝る。

「まったく…こいつは宮野志保だ。最近ココに引っ越してきたんだ」  
歩美はその時、志保をじっと見上げた。

「どうかしたの？」

志保も気づいて行つた。

「ううん、何だか、歩美のお友達に似ているような気がする…」

「灰原さんのことですか？」

その名前に、二人は少しドキツとする。

「今日、仲の良かったお友達が、二人も転校しちゃったの…」

「ずいぶん、突然でしたね…」

「オレ達にも、一言も言ってくれなかったんだぜ」

「コナン君も、哀ちゃんも、外国に行っちゃったの…」

そう言ってるうちに、歩美はついに泣きだした。

「大丈夫だって。お前らは、少年探偵団の仲間なんだろう？」

それならいつか会えるさ」

新一はそう言って、歩美の頭をそつとなでる。

「そうですね！」

「オレ達、仲間だもんな！」

「今度二人に会うまでに、私達だけで事件解決できるようにならなきゃ」

そう言って、三人は元気良く駆け出して行つた。

「いいの、工藤君。あんなこと言って…」

「ん？何がだよ」

「…また、いつか会える、なんて言って…」

志保はためらいがちに言つた。

「だって、本当にいつか会えるだろう？」

「な、何言ってるの、あなた。私達は会えるかもしれないわよ。でも、あの子たちは…」

「いつか、あいつらがもっと大きくなったらさ、本当のことを言つたしたら、また会えたことになるだろう？」

新一は、ニツと笑って言つた。

その表情に、またしても志保はドキツとしてしまふ。

今だけじゃない。さつきからずっとだけど…。

先程、光彦に、『二人は恋人か』と聞かれた時からずっと。

いやな気は全くなかった。むしろ、少し嬉しかった。

でも、その瞬間、蘭のことが浮かんで、心がズキツといたんだ。

「にしても、光彦のヤツ、会って早々、お前と俺が恋人かーとか、何聞いてんだか…」

志保の横で新一がそう言うのが聞こえた。

「そ…そうね…」

少しショックを受けながらも、志保は答える。

「（オレらのどこを見たら、恋人に見えんだっつーの）」

新一は小声で言った。おそらく、志保に聞かれないようにするためだろうが、志保には聞こえていた。

「でも…」

「ん？」

「私は…いやな気はしなかった」

（やだ、何言ってるの、私…）

そう思っても、今更止められなかった。

「たとえ、一瞬でも、あなたとそう見られて…嬉しかった」

「宮野…？」

「私…、あなたが好きだから…」

そこまでいって、ようやく言葉が止まる志保。言ってしまったから、後悔が押し寄せてきた。

「そつ、それじゃ、私、先に行くわ!」

「えっ?お、おい、宮野!」

うしろからの新一の声にも振り返らず、志保は走っていった。

告白！？（後書き）

御詫び：志保さん、および哀ちゃんファンの皆様、  
すいませんでした・・・。

作「いやー、今日で地獄のテストも終わりました〜！  
コレで、勉強ともおさらばです！」

新「油断してつと、成績落ちんぞ？」

作「うつ…新ちゃん厳しい…」

新「ホントのことだろ」

作「あれ？新ちゃんて言っても怒んないの？やったー！」

新「……………」

作「おい、新ちゃん？しーんちゃん？」

新「うるせー！連呼すんな！」

作「うわーん、また怒られた〜」

作者は、心から有希子さんを尊敬します…。

裏切った…？

言っちゃった…。絶対に、言わないでおこうって…、封印しておこうと思ったのに…。

何で言っちゃったのよ、私。

志保は頬を伝う涙も気にせず、走り続ける。

（コレは裏切りよ…。私は、友達の蘭を、裏切ったも同然だわ…）  
走って走って走って……ようやく阿笠邸に着く。

「おお、お帰り、志保君。どうじゃったかな、学校は？」

ドアを開けると、阿笠博士が出てきた。だが、そんな博士を押しつけて、志保はまっすぐに、地下室へ向かう。

「う…うわああ！…あああ…」

今は、とにかく、一人でいたかった。一人で泣きたかった。

やがて、泣き疲れたのか、志保はそのまま朝まで眠ってしまった。

「…志保君。大丈夫かね？」

次の朝、博士は心配そうに、地下室のドアをそつと開ける。

「あつ…博士…」

志保も気づいて、起き上がる。

「何かあったのなら、無理せんでも…」

「うつん、もう平気よ、博士」

本当は全く大丈夫じゃないけど…。博士に心配をかけたくなかった。

重い足取りで、玄関を出ようとする。

「志保！おはよう」

そこには、満面の笑みを浮かべた蘭が立っていた。

「お…おはよう」

正直、今蘭には会いたくなかった。

「さ、志保も一緒にいこ！あの大バカ推理之助を起こしてやんなきゃ」

その言葉を聞き、志保はビクツと震えた。

「ご、ごめんなさい。私、ちょっと具合悪くて…。悪いけど、先に行って」

と、見え透いた嘘をつき、ボタンとドアを閉めてしまった。

「…志保…？」

蘭はその場でしばらく混乱したまま立っていたのであった。

そして、その20分後、志保もようやく外に出た。

転校二日目にして、すでに行きたくなくなってしまった高校でも、博士に迷惑をこれ以上かけられない！

「志保！大丈夫？具合悪いんでしょ？休まなくてよかったの？」  
案の定、学校へ着くと、蘭はすぐに志保の方へ飛んできた。

「ええ、大丈夫よ」

志保は何とか笑みを作る。

隣には、すでに眠そうに頭をこっくりこっくりやっている新一がいる。

できれば、新一が気付く前に逃げ出したい、とさえ思った。

だが、そんな志保の願いが通じたのか、今日は新一は大半の時間をそうして過ごし、志保とは一言も話さなかった。

「新一ってば！もうっ、起きなさいよ！ずっと寝てばかりじゃない」

見かねた蘭が何度起こそうとしたことか。そのたびに新一は、  
「あともう少し…」  
などと、言っているのである。

結局、午後の授業まで寝て過ごした新一は、帰りのホームルームが終わると、気持ちよさそうに伸びをした。

「あゝあ、よく寝た…」

「そりゃあんだけ寝てりゃあねえ…」

「ほんと」

欠伸をしている新一を見て、園子と蘭は言った。

その様子を横目で見ながら、志保はさっさと支度を始める。

新一が起きた今、一刻も早く、帰りたいかった。

「じゃあね、志保、気をつけてね」

そう言っただけは部活に向かった。

やがて、皆下校するものも、部活へ行くものも行ってしまう、残っ

たのは、一日居眠りをしていて担任に軽く説教されている新一と、昨日持って来たばかりの医学の本を探している志保だけである。

（もう。どこにやっちゃったのかしら……。早く帰りたいのに……）  
そうは思っても、簡単には見つからず、新一の説教が終わった後も、志保はまだ探していた。

（仕方ない……。諦めて帰るしか……）

「おい、何搜してんだよ？」

バッグを手に持ちながら、新一が声をかける。

「手伝うか？」

「いつ、いい！平気だから！」

そう言って、志保は我慢できずに、教室を出ようとした。

「えっ？おい、待てよ、宮野！」

逃げようとした志保の腕を、新一は咄嗟につかむ。

「離して！」

志保は思わず叫ぶ。

「新一……？志保……？」

顔をあげると、そこには、戸惑いの顔色を浮かべた蘭がいた。

「ら、蘭……」

新一の声で我に返った蘭は、慌てたように言った。

「ごっ、ゴメンね、邪魔しちゃって……。す、すぐ出るから……」  
そう言って蘭は、すぐさま駆け出して行った……。

「…追いかけなさいよ…」

「え？」

「好きな女<sup>ひと</sup>も、追っかけられないの？」

志保がそう言くと、新一は少し真顔になって、

「わりい、宮野！ちよつと行つてくる！」

と言って、蘭の後を追った。

裏切った…？（後書き）

作「あああ…、この小説、絶対に、あと一、二話で終わる…」

新「へえー…。んで？」

作「なんかさー、小説とかって、終わる時、妙に悲しくなんない？」

新「そうかあ？」

作「フーンだ！もういいもん！Usaはもうすでに、新しい小説考えてるもん！でも、蘭ちゃんと新ちゃんラブラブにしてやんない！」

新「なんだそりゃ…」

作「どうせだったら、新ちゃんが蘭ちゃんにちょうひどい振られ方をする話にしよっかな…」

新「…すいませんでした…」

皆様、ご安心を！蘭ちゃんは、新ちゃんを振りませんから！（たぶん…）

## 誤解（前書き）

結構遅い時間に投稿したので、  
多少言葉がいい加減かもしれませんが…。

## 誤解

私ってバカ…ホント、バカ。

あの二人、教室で何か話してた。

新一、志保の手つかんてた。

「待てよ」って、言ってた。

やっぱり…そういうことだよ…ね？

あの二人って、やっぱり…付き合ってるん…だよね？

なのに、私ってば、新一が帰ってきたことに一人で浮かれて、今度告白する…なんて。

ホンッと、バカ。

結局、私の１７年間の想いって、なんだったの？

こんなつらい想いするために、私は新一の帰りを待ってたの？

蘭はただひたすら走り、屋上へ行く。ここだったら、思いっきり泣ける。

ここだったら、誰にも声なんか聞こえないし。

「うつ、うつ…。うわーあああつっ!!」  
もう今は、何も考えたくない。  
一人で泣いていたかった。

ゴメン、園子。私、新一に、告白できなかったよ…。  
あんなに応援してくれてたのに…ごめんね…。

志保…。私、わかってた気がする。

志保が新一のこと、好きだって。哀ちゃんの時から、ずっと。

そりゃあ、わかるよ。だって、私も一緒なんだもん。

新一のことが好きだったから。ちっちゃいころから、ずっと、ずっと。

でも、私、諦めるよ。新一のことは大好きだけど、  
でもね、その分、志保のこととっても大切だから…。

ありがとう、新一。ずっと傍にいてくれて。

コナン君の時も、新一の時も。

本当は、今でも新一が大好き。この気持ちだけは、だれにも負けな  
いと思ってる。

でもね、新一。今、私、今まで新一を待つて気づいたことがある  
んだ。

『新一がいなくても、私には、支えてくれる人がたくさんいる』

だから、私は今まで、新一がいなくても、耐えることが、出来たん  
だよ。

時々、会いたくてたまらなかったりしたけど。

でも、そのたびに、誰かが傍にいてくれたから…。

大丈夫。

今なら、私は新一を諦められる。

正直、志保を恨んじやいそうで、怖いけど、今なら、大丈夫だと思う。

今までありがとう、新一…。大好きだったよ…。

「その言葉、できれば面と向かって言ってもらいたかったな」

「えっ？」

## 誤解（後書き）

作「もうこんな時間！投稿していると、時間がたつのを忘れちゃいそう」

新「てめえ、学生のくせに、まだ起きてんのかよ……」

作「いいじゃん、明日お休みなんだもん」

新「付きあつてらんねえ」

作「……………新ちゃんひどい（泣）……」

最近、新ちゃんが冷たいです…。作者はちょっと悔しいです…。

## 最終話（前書き）

もうこんな時間！急がないと、お母様に怒られちゃう！  
なーんて思いながら、書きました。

## 最終話

「その言葉、面と向かって言っただけだったな」

「えっ？」

蘭が振り向く視線の先には、新一がいた。

「し、新一……」

「まったく、いきなり泣きながらどこ行っただかと思っただら、やっぱりここだよ」

「な、何でここがわかったの……？」

驚いて声がうまく出ない。

「バーロオ、オレは探偵だぜ？その気になりや、お前の居場所くらい、すぐにわかるっつーの」

何だ……、そういうことか……。

「なあ、蘭、今の、ちゃんと覚えてくれよ」

「……ハ？」

思わず間抜けっぽい声が出る蘭。

「今ずっと言っただろ？それを、今度は俺の前で、言ってくれよ」

「き、き、聞いてたの、今の……？て、ゆーか、私、いつしゃべって……」

……／／／／／／／／

「なーに言っただよ。全部しゃべってたぜ？」

新一の言葉に、蘭は顔を真っ赤にする。

しゃべっているのにも気づかないなんて、どんだけバカなんだろ……。

「言ってくんねえの？」

「な、何をよ…」

「今お前が言ったこと、全部」

「い、言わないわよ、バカ！／＼／＼／＼」

蘭がそう怒鳴っても、新一のニヤツとした笑いは消えなかった。

「…し、志保は？おいてきたの？」

「え？宮野？」

「話、してたでしょ。…腕つかんで」

蘭は最後の言葉を強調する。

「えーっと…まあ、あれはだな…アイツが逃げようとするからつい…」

「逃げようとするような話をしてたわけ？」

「知るかよ！とにかく、宮野が突然逃げようとしたんだよ」

ホントかしら、というような目つきで、蘭は新一を見た。

「と、とにかく！オレが宮野の腕をつかんで話してたからって、オレ達はその…あ、相棒だからな！」

宮野は俺の相棒なんだよ」

新一は慌てたように言う。

「…新一と志保は、付き合ってるんじゃないの？」

「だから、そうだったってんだろ」

ホントはいけないのに、何だか、涙が出てきてしまった。

「おつ、おい、大丈夫かよ」

突然の蘭の涙に、新一はかなりの慌てっぷり。

「うん…、平気…」

蘭はそう言って、少し笑う。

そして…新一は蘭を抱きしめたのだ。

「し…新一!？」

びつくりして、涙も止まる。

「な、何よ、離して!」

「離すかよ、バーロオ」

新一は、蘭を、あの青い瞳<sup>め</sup>で見つめる。

「オレは蘭が好きだ。う、嘘じゃねえからな。嘘でこんなこと言わねえけど…// // //」

「……………」

蘭はあまりの驚きに、一言も言葉が出ない。

「…ンと？」

やっと言葉が出る。

「ほんと…新一…?」

「だから…嘘でんなこと言えるかつつの」  
止まったはずの涙がもう一度出てくる。

「…蘭…?」

新一の言葉にこたえる代わりに、蘭は新一を抱きしめ返した。

「…蘭、もう一回言う。オレは蘭が好きだ」

「…うん」

「何があっても、オレはお前の傍にいるからな」

「…うん」

「たとえ、何が起こっても、オレは蘭を手放す気はないからな」

「…うん…」

二人は今、幸せだった。

たとえ、この場を覗いている二つの影がいたとしても。

## 最終話（後書き）

作「どーもどーも！作者でーす」

新「何でんなハイテンション…」

作「新ちゃん、蘭ちゃん、ついにカップル、おめでとうー」

新・蘭「……／／／／／」

作「いやー、一時はどーなるかと思ったけど、無事にすんでよかったよ…」

新「そーいや、コレ、最終話だろ？終わり方、おかしくね？」

蘭「確かに…」

作「あつ、言っの忘れてた！あと、もう一話か二話続くよ」

皆様、あともう少し、作者に付き合ってください！

## エピソード（前書き）

これで、ついに最後となります。（たぶん）  
どこまでもマイペースで、ノータンキな作者は、この後、  
何を書くのか考えながら、ご覧下さい！

## エピソード

「…これでよかったの、志保さん？」

屋上から、幸せそうな蘭と新一を見て、園子は言った。

「…なぜ？」

志保も同じく、二人の姿を、悲しそうな微笑で見つめていた。

「だって、志保さんも新一君のこと…」

「そうね…。私は、確かに、彼が好きだった。でも、私は彼に自分の気持ちを伝えようなんて、最初から考えてなかったわ」

「…そう」

「私、この間、工藤君に告白したのよ」

志保の爆弾発言に、園子は目を見開く。

「答えは聞いてない。でも…どうせ、わかってたから。

蘭にはかなわないって」

その言葉に、園子は少し笑って言った。

「あつたりまえよ！だってあの二人は、うちの高校の名物夫婦なんだもの！」

「私、今だったら、蘭と本当の友達になれる気がするの。」

昨日までは、心のどこかで、ずっと蘭のこと、うらやましく思ってたから」

そう言う志保の顔は、さっきとはうって変わって、晴れ晴れとしていた。

「あたしたちも、結構仲良く行けそうじゃない、志保？」  
突然の園子の言葉に、志保はしばらくキョトンとしていた。

でも、すぐに笑顔になり、  
「…ええ、そうね、園子」  
と、言った。

「さあーて！明日から忙しくなるわよ！何てったって、あの二人が恋人同士になったんだもの。  
思いつきり冷やかしてやんないかね？」  
園子はいつも、コレである。

「あら、そういうことだったら、私でよければ協力するわよ」  
思ったよりこの二人は、息が合いそうである。

「もつちろん！何からやろうかしらねえ…」  
この時の園子の表情は、さすがの新一も真っ青になって逃げることだろう…。

「はじめから、ドカーンといくのもいいけど…やっぱりここは、じわじわといった方が…」  
一体、何を計画しているのだから…。

「だったら、いい考えがあるわよ」  
この時、二人が考えたことは、蘭と新一のことを考え、口外しないこととしよう…。

そして、未だにこの二人のあやしげな行動に気付くわけもなく、  
蘭と新一は、幸せに浸っているのであった。

はたして、二人には、どんな悲惨な明日が…、いや失礼。  
どんなに幸福な未来が待っているのだろうか。

それは、神のみぞ、知ることである。

2人の真実のトビラは、これから先も開き続ける。

## エピローグ（後書き）

作「いやーとうとう完結いたしました。皆様、今までこのノートンキな作者に付き合っていただき、ありがとうございます」

すぐに、別の小説を始めるつもりですので、興味がございましたら、そちらもご覧ください。ココだけの話、次書く小説は、実は恋愛系ではなく、ファンタジーに近いものです」

新「ファンタジー？」

蘭「新一！最後なんだから、静かにして！」

作「あゝ…、うん、そうですよね…」

新「納得すんな！つか、合わないってわかってんなら、最初っから書くんじゃない…」

蘭「新一！最後なんだから、静かにして！」

新「…すみません…」

作「おやおや、流石の名探偵も、蘭ちゃんには、かないませんねえ」

新「ンだと…？（ギロツ）」

作「ヒイツ！」

皆様、とにかく、ありがとうございます。

命の危険を感じましたので、これにて終わりにいたします。

今後もコナン大好き娘 u s a をヨロシクお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8507/>

---

真実のトビラ

2011年10月7日07時16分発行